



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	小林昭博著『クィアな新約聖書：クィア理論とホモソーシャルティ理論による新約聖書の読解』（風塵社, 2023年）
Author(s)	吉谷, かおる
Citation	基督教學, 59, 31-37
Issue Date	2024-07-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92962
Type	journal article
File Information	03yoshitani.pdf



並行しているのか？しかし、一六二がマルキオンによる
と考えれば驚くことではない。なぜ、皆はマルコ一六・三
―四に従わず、マルコ一六・五だけをとりあげているの
か？ルカがマルコに従っているなら、なぜルカは、マル
コ一六・二、五には正確に従いながら、そうしただけで、
一六・三―四を飛ばしているのか？マルキオンを見てみ
ると、(マルキオン二〇・一―二)は完全な連続体をなし
ており、五つの福音書の箇所全てに並行している。四つ
の福音書全部が独立していると考えるのはナンセンスだ
ろうから、もしマルコが他の三つの福音書の箇所の資料
だとすると、マルコ以外は一六・二には従わず、一六・二
を使い、一六・三―四は採らずに、しかし再び一六・五に
従うというふうにして、お互いに知るか、どれかを資料
とする必要があっただろう。しかし、みなマルキオンに
従っていると考えれば、説明は容易である」(V, p. 274)。
その他にも、このように眺めまわしていると、いろい
ろと見えてくることがある。たとえば、マルキオンはル
カを「削った(だけ?)」と言われるが、ルカにある単語、
比較的単純な言葉すらマルキオンとは異なっていたりす

書 評

小林昭博著

『クイアな新約聖書』 ―クイア理論とホモソーシャ リテイ理論による新約聖書の 読解』(風塵社、二〇二三年)

吉谷かおる

本書は、二〇二一年に刊行された『同性愛と新約聖書
―古代地中海世界の性文化と性の権力構造』(風塵社)
で、キリスト教が生み出した同性愛への偏見を聖書学か
ら正面切って批判した小林昭博氏の近著である。前著
は大部の学術書でありながら多くの読者を得ていると聞
くが、多彩な内容の研究業績をコンパクトに収めたこの
『クイアな新約聖書』はより手に取りやすく、ことにフェ
ミニスト神学とクイア理論に関心を持つ読者にとっての
待望の一書といえるだろう。

る(V, pp. 256 ff.)。また、ルカとは異なるが他の福音書と
並行する単語も見られる。さらに、ルカにない章句もあり、
それだけではマルコがルカを削ったとされることの反証
にはならないとしても、場合によっては、それが他の福
音書と並行している箇所(たとえば、マルコ一六・三とマ
ルキオン二〇・二の並行など)はどう考えるべきなのか？
さらには、「マルキオン福音書」の、正典四福音書のみ
ならず、「ペテロの福音書」などとの並行や、いわゆる「西
方型本文」との類似などが指摘されている(V, p. 273)。
先に言及したLieuは、いわゆる「共観福音書問題」に
ついて、この「マルキオン福音書先行説」とも絡めて、「い
ずれにせよみな仮説である」(Lieu, op. cit., p. 746)と言っ
ているが、それはそうだとし、むしろそうであるが故に、
BeDuhnが書いているように、「これは、多くの場合先立
つ神学的判断から現代の学問的研究にまで直接持ち込ま
れ固守されてきた前提からは解放された、キリスト教史
と聖書の歴史の真剣な探究の、終わりではなく、始まり
なのだ」(B, x)ということにはなるであろう。

聖書は、今日わたしたちが抗わねばならないジェン
ダー・セクシュアリティに関わる差別・抑圧、すなわち
「家父長制」(patriarchy)、「女性嫌悪」(misogyny)、「同性
愛嫌悪」(homophobia)、「異性愛主義」(heterosexism)、「強
制的異性愛」(compulsory heterosexuality)、「異性愛規範」
(heteronormativity)、「シス規範」(cisnormativity)といった
差別・抑圧の論理を支えるものとして用いられる。前著は、
新約聖書と旧約聖書には「同性愛」に関する記述は存在
せず、「同性間性交」に言及する聖書の諸テキストが「同
性愛は罪である」という言説の典拠になりえないことを
明らかにするものであったが、著者が予見している通り、
「同性愛は罪だと聖書に書いてある」と言い放って同性愛
者を断罪する者たちは簡単にはいなくならず、差別も根
強く残っている。フェミニスト聖書学を延伸し、キリス
ト教の再構築を目指す本書の「クイアな読解」の試みは、
研究者に限らず、教会をはじめとするキリスト教のミニ
ストリーの現場にフェミニスト聖書解釈から学んだ成果
を持ち込んで、社会にコミットし、変革につなげようと
する者たちを鼓舞する新たな力となるものである。

本書は論文集で、書き下ろしの序章「イエスとBL（ボーイズラブ）」——イエスと男性弟子の恋愛——を冒頭において二部構成となっている。第一部「ホモエロティシズムと師弟愛——ヨハネ福音書における男の絆」は「クイア理論」と「ホモソーシャリティ理論」によりヨハネ福音書の読解を行う三章から成っている。続く六章から成る第二部「クイアな新約聖書」は、「ジェンダー研究」「セクシュアリティ研究」「クイア理論」を用いた新約聖書の読解を行うものである。序章では、BLという人気ジャンルになぞらえて、ヨハネ福音書のイエスと男性弟子が恋愛関係にあったという想定を示し、現代的な同性愛のフィルターを通した「クイアな読解」にテクストが開かれていたことを明らかにして、「同性愛嫌悪」、「異性愛主義」、「強制的異性愛」、「異性愛規範」という名の先入観から解き放たれた自由な読みへの備えとしている。このあとの第一部、第二部では、この「クイアな読解」が、現代的な異性愛のフィルターを通した「異性愛規範的な読解」によって「正しい読み」とされてきた解釈に、揺さぶりをかけることになる。

第一部の鍵となる男同士の絆、「ホモソーシャリティ」は家父長制社会の特質であり、ミソジニーとホモフォビアを併せ持つが、古代ギリシャ世界の「少年愛」はそのわずかな例外として、ホモフォビアとは関わらずにホモソーシャリティとホモエロティシズムを共存させていた。以下の三章では、ヨハネ福音書のなかのイエスと男性弟子との間の関係について、それぞれ次のように問題が設定される。

第一章「わたしを愛しているか——クイア理論とホモソーシャリティ理論によるヨハネ二・一五——一七の読解」は、イエスとペトロの間の愛を扱うものである。復活したイエスがペトロに「わたしを愛しているか」と三度繰り返して尋ね、ペトロはその問いに「わたしがあなただを愛していることはあなたが知っておられます」と三度繰り返して答える。これは、イエスを三度否認した罪が赦され、復権したペトロが初期キリスト教の代表者に任じられることを示すエピソードと解されてきたが、クイアな読解によれば、「信仰」ではなく「愛」を問われるこの描写は、「恋愛関係」であるように映る。なぜ、ペトロ

が教会の代表者となる要件が「信じる」ことではなく「愛する」ことだったのか。

第二章「イエスの胸に横たわる弟子——クイア理論とホモソーシャリティ理論によるヨハネ福音書一三章二一——三〇の読解」は、イエスとイエスの愛した弟子との間の愛を扱うものである。いわゆる最後の晩餐の場面、ユダによる引き渡しが予告され混乱が生ずる中に、「イエスが愛した弟子」が突如、イエスの胸に横たわった状態で現れる。しかもその姿は、二度繰り返し描写されることでいっそう強調される。なぜ、この緊迫した場面にイエスとイエスが愛した弟子との身体的・物質的親密さが強調され、この弟子がイエスの胸に横たわったままの状態で描かれているのか。

第三章「『見よ、彼は彼をどれほど愛していたことか』——クイア理論とホモソーシャリティ理論によるヨハネ一一・一二——一四の読解」は、イエスとラザロの間の愛を扱うものである。このラザロの復活の物語では、死者蘇生の奇跡物語や姉マルタの信仰告白に関心が向けられてきたが、クイア理論を用いた聖書解釈では、イエスがラ

ザロを「愛している」ことが三度にわたって強調されていることに注意が向けられ、イエスとラザロの間にホモエロティシズムを読み取ろうとする試みがなされている。なぜ、ラザロの復活物語を描くうえで、イエスが弟子であるラザロを愛していることが強調されたのだろうか。

著者は、これらの三つの章で扱われるイエスと男性弟子との間の関係について、従来の「歴史批評的研究」と「クイア理論」による読解の間には矛盾が生ずるとして、「ホモソーシャリティ理論」を導入することにより、その関係を「ホモソーシャリティ」と「ホモエロティシズム」を共存させる「ホモソーシャルな連続体」を構成する「師弟愛」として描き出す。「ホモソーシャリティ理論」を援用することで、ギリシャ哲学者とも通底する「師弟愛」が導き出され、それぞれのテクストで愛が強調されている理由が解明されるのである。イエスと男性弟子との親密な関係をBLから類推される男性間の恋愛としてのみ捉えるのではなく、「クイア理論」と「ホモソーシャリティ理論」を併用することで十分な理解が得られるとされるが、ここで明かされる「師弟愛」の関係性を、たとえば

現代の日本のホモフォビクなキリスト者であれば、どのように受け止めるのだろうか。知りたいところである。

続く第二部では、まず第四章「異性愛主義と聖書解釈——フイレモン書一b——二節におけるフイレモン、アプフィア、アルキッポスの関係性」で、フイレモン書の三人の共同受信人の関係性についての従来の解釈が、解釈者の無自覚な「異性愛主義」を前提にしていたことが明らかにされる。第五章「クイア化する家族——マルコ三・二〇——二一、三一——三五におけるイエスの家族観」は、このテキストに描かれているイエスが、伝統的な家族観や家族制度とは一線を画す存在と見られることに着目し、イエスの家族観のクイアさを明らかにしようとするものである。イエスは自分のもとに来た身内の者たちと会おうとせず、群衆を「家族」と呼ぶ。このようなイエスの姿とその家族観は、異性愛規範を脱構築する新たな家族観「クイア化する家族」（河口和也）や異性間の終身的な単婚制度の規範を批判する「（ヘテロ）セクシズム」（竹村和子）の視点ともクロスする問題意識を表すものと考えられる。

られていないことが批判され、ホモフォビアに満ちた聖書テキストの翻訳について再検討してほしいとの要望、そのさいには「聖書が持つ差別性と向き合うという姿勢」を持ち問題や課題を共有できる新たな聖書翻訳として誕生してほしいとの希いが明確に述べられている。

第五章で論じられているように、イエスは単身者と思われ、みずからの家族を拒絶しているようですらある。福音書のどこをどう読んでもイエスが父—母—子を規範的な家族として推奨するような場面は見出しがたいはずだが、キリスト教の教会には、異性愛規範、家族主義が強く働いている。第二部の論文はどれも刺激的であり、ことに第五章「クイア化する家族」、第七章「マリアのクリスマス回復」、第八章「クイアな聖家族」は、異性愛規範や規範的家族観の押し付け、桎梏に苦しむ人にとっての助けになるだろう。トランスジェンダーに対する差別的言動から端的に見られるように、社会の分断や対立が進む昨今、聖書のなかにある「差別・抑圧の論理」を批判することを通して、自分自身をも含めたキリスト教および現代世界のジェンダー・セクシュアリティと関係

第六章「『イエスとクイア』から『クイアなイエス』へ

——クイア理論を用いた聖書解釈の新たな地平」は、クイア理論を用いた聖書解釈の歴史、イエス再読の試みの紹介、イエス再読の実例（ヨハネ一九・二五——二七）で構成されている。第七章「マリアのクリスマスの回復——文化研究批評（ジェンダー・セクシュアリティ研究）による解釈」は、ルカのクリスマス物語をジェンダー・セクシュアリティ研究による読解を通して再読し、「女性嫌悪・女性蔑視・女性軽視」に染め抜かれた物語とその読解からマリアのクリスマスを回復する試みである。第八章「クイアな聖家族——ルカ降誕物語のクイアな読解」は、ルカの降誕物語が描く「聖家族（幼な子イエス、母マリア、父ヨセフ）」が「理想の家族」や「規範的な家族」からはかけ離れた「クイアな家族」であることを明らかに出す。最終章の第九章「『聖書協会共同訳』のクイアな批評——教会、キリスト教主義大学、クイアな空間で読む」は、二〇一八年に刊行された『聖書 聖書協会共同訳』に対して、クイアな批評を試みるものである。この三十年間の同性愛者差別の問題も性的少数者の課題も考慮に入れ

する差別や抑圧を問い直すことを促す本書の意義は大きい。クイアな聖書解釈の可能性がさらに押し広げられ、議論が発展することを期待する。